

第1回「日本語大賞」

テーマ 「人と人をつなぐ日本語」

高校生の部 優秀賞 受賞作品

「心の中の言葉」

大阪府

初芝立命館高等学校 1年

野村 幸代

心の中の言葉

初芝立命館高等学校 一年

野村 幸代

言葉には自分自身や人に良い影響、悪い影響を与えたりする不思議なエネルギーがある。言葉と言葉を交わすことでコミュニケーションができる。家族や先生、友人、近所の人などと交わす挨拶の言葉はとても気持ちが良いものである。感謝の言葉、喜びの言葉、褒めの言葉、愛の言葉などは人間関係を円滑に運ぶために必要な言葉でもある。言葉は使い方によって人を傷つけたり、人を守ってくれたり、勇気づけたりしてくれる。私も日常の中で、数々の言葉に支えられながら生活をしている。友達からの励ましの言葉やメールをもらった時はとてもうれしかった。言葉にはその人の人生を大きく左右する力があると思う。

人と人が交わす言葉のほかに自分の心の中で思う言葉もある。思いの言葉である。心で強く思った言葉ほど現実になってしまう。自分の意識がそうしてしまうのではなく、思いの言葉は強ければ強いほど、言霊となる。自分の潜在意識がそうさせた信念の言葉である。言霊には目に見えない力が宿っている。その力は信じる力が強くなければ発揮されることはない。少しでもマイナス思考の思いの言葉や疑いの心の言葉を抱いてしまうと、自分の夢や願いは叶わない。言霊の威力はなくなってしまふ。私は心の中にある言葉の力を信じている。

私が中学三年生の時の話である。中学校生活最後の夏休みで、私は受験勉強の忙しい中、毎日吹奏楽部でクラリネットの練習に励んでいた。吹奏楽部の夏休みといえば、コンクールである。どこの学校もコンクールに向けて金賞を目指し、一生懸命練習しているものだ。私の学校は小編成の中では最大の人数である三十五人で演奏することになった。OBやOGの方々、市の吹奏楽団の方々が毎日のように教えに来てくれた。その成果もあって、私たちは以前より格段にうまく演奏することができるようになった。そんな中、コンクール当日まであと三日という日になって、部員全員が冷や汗をかくようなハプニングが起きた。首にかけていたバリトンサクスを吊り下げていた紐が切れ、楽器が床に落ちてしまい、大きくへこんで音が少しも出なくなってしまうのだ。楽器の修理には一週間以上もの時間がかかり、本番までに到底間に合わない。その日はバリトンサクスなしでセクションを行ったが、曲全体の土台でもあり、ソクの伴奏役を務める重要

なバリトンサクソがないと成り立たない。仕方がないので顧問の先生が同じ市内にある高校に借りに行ってくれた。それから気を取り直して再び練習した。部員一人ひとりが金賞を取りたいと強く願っていた。ところが、もっと大きなハプニングが起きたのである。

コンクール当日。朝の六時から学校に集合し、基礎練習や合奏をした。朝早くから先輩方や楽団の方々も応援に駆けつけてくれた。頑張れの言葉は私たちに自信をくれた。楽屋は緊張感でいっぱいだった。本番直前、みんな深呼吸して、できるだけリラックスを心掛けた。ほかの学校の演奏が自分たちよりも上手に聞こえてくる。前の学校の演奏が終わり、いよいよ私たちの本番が始まった。今日のために練習してきたんだ。私は何度も何度も自分に言い聞かせた。ホルンのソロが吹き始めたその瞬間、ガツシャーンという音がした。突然シンバルが落ちた大きな音が聞こえたのだ。ソロを吹く静かな場面の出来事だった。ホルン奏者は驚いて少し音程を狂わせてしまったが、諦めずいつものペースを取り戻した。ほかの部員も今まで頑張ってきた努力を出し切るように演奏した。バリトンサクソも調子が良く、ソロを担当していた私は全力を尽くした。シンバルが落ちたからといって絶対諦めない。そう心の中で思った。毎日練習を重ねてきた指揮者の顧問の先生とみんなが一丸となって舞台の上で演奏が終わった。私たちの思いはただ一つ金賞をもらうこと。それだけを強く願って最後まで吹ききった。

結果発表。部長が舞台上に上がりトロフィーをもらいに行く。全員が金賞でありますようにと願った。緊張感に包まれる中、私たちの学校の名前が呼ばれた。結果は金賞。部員全員が声を上げて叫び喜んだ。どこの学校よりも喜んだ。後から聞いた話だが、シンバルを落としたのは舞台袖で待機していたほかの学校だった。みんなの金賞を取る、取りたいという言葉と心の言葉の強い思いが言霊となってこの結果を引き起こしたのだろう。突然のハプニングにも気を取られずに、強い信念がそこにはあった。手にした成績は格別なものだった。

自分の中にある思いの言葉は時間がかかるかもしれないが、努力して、いつか言霊となって夢を叶えるまでもち続けていきたいと思う。素敵な言葉は、自分やその人を成功へと導くことを信じて。